ラグナロクオンラインSS第2章 番外編 SAVE！～彼女の事情～

梶原 ？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラグナロクオンラインSS第2章 番外編 SAVE！～彼女の事情～

【Nコード】

N2284P

【作者名】

梶原？

【あらすじ】

クリスと連絡を取ろうとしてもできなかったエルハイム。その時、クリス側では何が起きていたのか。「彼女の事情」がいま明らかに！！クリス「寝過ごしたただけだなんて言えないわ・・・。」

(前書き)

これは前回投稿の「ラグナロクオンラインSS第2章 Girl's Hope!」を見てないとあまり展開がわかりづらいかと思いません。

よければそちらをご覧ください。ただけると分かりやすいかもしれません。

それは本当に一瞬の出来事だった。

いや、自分の気の緩みだったのかもしれない。

1ヶ月前のあの出来事以来何の音沙汰も無かったので、少し油断していたのだ。

簡単に言ってしまうえば、またエリイがさらわれたのだ。

「ちいっ！」

そう舌打ちを打ちつつ、日も沈み、漆黒の闇を包むプロンテラの街を駆けるクリス。

自分の家へと向かう途中に、突如歩みを止めたエリイが

「ク、クリスさん！お、お手洗い行ってきていいですか！！」
などと切羽詰った顔で言うので、

「あーはいはい。んゝほら、そこにお店あるでしょ。あそこで借りてきなさい。」

軽く辺りを見回してある雑貨店を見つけると、そこを指して言う。

「はぁ〜い！！！」

そう言っつてその店へと駆けて行くエリイ。

「全くしょうがないわねえ。」

などと軽くため息をつきながら店の外で待つ。

上着から一本のタバコを取り出し、火をつけ煙をふかしながら待つこと、5分弱。

いまだに出てくる気配は無い。

まあ女の子は時間かかるなーなどと、自分の事は棚に置きながらさらに待つ。

6分、7分、8分と時間はさらに過ぎていく。
ひよっとしておつきい方なのかな？などとちよつと失礼な事を思い始める。

そういえばお腹押さえてたっけなーなどと軽く記憶を捏造しながら
もう少し待ってみる。

・・・。

もうすぐ15分近く経つ。

いくらなんでも遅すぎる。

そこで一瞬、嫌な予感が頭を過ぎる。

「まさかっ!!」

そう思った時には店の中へと勝手に体は動いていた。

もの凄い形相で店へと入ったのか、店員が軽く引きつった顔で

「い、いらっしやいませ!!」

そう言ってくるが、そんな事など気にしていられない。

「ねえ!さつき女の子がトイレ借りに来なかった!？」

引きつった顔の店員に詰め寄るように話しかけながら迫るクリス。

その顔にほとんど余裕など感じられなかった。

「あ、あちらの方へ行かれましたけど・・・。」

そう言っつてトイレの方を指差す店員。なぜか半分泣き顔だ。

「ありがとう!」

そう言いながら店員が指差した方へと走る。

何事も無ければそれはそれでいい。もし本当に用を足している途中
ならそつちの方がまだました。

そう思いつつも勢いよくドアを開け放ち

「エリイ!!」

そう叫ぶが、そこには誰もいなかった。

よく見るとトイレについている小窓が見るも無残に壊されている。

「やられた・・・!」

そう思いながらもすでに頭は様々な可能性を導き出そうとしている。
誰の犯行なのか?どうやって?なぜ今頃?

何となく想像はつく。

しかし、そうだとしても何処へ連れて行かれたのか検討がつかない。頭は焦り始める。

そう思った時だ、ふとトイレへの端の方へと眼をやると何やら一つの紙切れが落ちている。

それを手に取り見てみると、何か文字が書いてあるようだ。

そこにはこう書かれている。

『今夜21時、ヴィルゴ邸にて待つ。』

たったそれだけだった。

その紙を握り締め、強く唇を噛み締める。

どうやら自分が想像していた人物とは違うようだ。

が、一つだけ分かる事がある。

これは、自分への挑戦状だ。

その為に、エリイはダシに使われたのだ。

思い切り握り締めた拳をトイレの壁へと打ちつける。

「いい根性してるわね・・・。」

一言そう呟くと、静かにトイレから出て行く。

帰り際に先ほどの店員と目が会つと

「トイレ、ぶつ壊されてるわよ。」

とだけ言い、静かに店を出て行く。

慌てて店員がトイレへと走っていく姿があったが、そんなことはどうでもいい。

自分のせいで、彼女を巻き込んでしまった事が許せない。

「待っててね、エリイ。すぐ行くから・・・。」

そう思いながら走り出すクリス。

途中、上着に入っている携帯コンソールが鳴ったが、そんな事は気にしてられない。

その足はまっすぐ、因縁の場所ヴィルゴ邸へと進んでいた。

「・・・ん？」

ふと目が覚めた。

淡い記憶の中で、自分が何をやっていたのか思い出す。

たしか自分はトイレに行っていて、たしかその途中で・・・

「あぁっ!!！」

そこで思い出す。

そして自分が今どういう状況さらされいるか身を締めて感じる。

足元に地面が、無い。

まるで宙に浮いているような感覚。

いや、まさに浮いているのだ。体中をロープでぐるぐる巻きにされ、

どこか天井から吊るされているのだ。

「え！何なんですかこの状況は！」

何だかわからずにとりあえず叫ぶ。

「悪いなお嬢ちゃん、少しそこで大人しくしてくれや。」

そこで、自分の下の方から男の声が聞こえる。

「だ、だれです!？」

その声へと向かって問うエリィ。

男の容姿を確認しようとするが、どこかの暗い部屋にいるせいと、

吊るされているせいでよく確認できない。

「あまり大きな声を出さない方がいいぜ。こいつらがびっくりして

襲っちまうかもしれないからね。」

そう言う男の周りには、何か得体の知らない物が何匹か見え隠れす

る。それははつきりと見えた。

そう、どう見ても人間ではない。

それは本能のままに動くかのような、赤く鋭い瞳をした、魔物だろ

うか・・・。

その体は漆黒の闇のように黒く、そして何よりそれ自体が影のよう

に半透明のような、形状の無い物でできているようだ。

その数、目に見ただけでもおよそ10体。

その黒い物体の中心、まるで囲まれるようにして一人の男が立って

いた。

「あ、あなた一体なんなんですか？」

今度はあまり声を立てないように、静かに聞く。その状況はあまりにも不自然だ。まるで魔物が人間に使役しているかのようだ。

「これは俺の使い魔のような物だな。死霊使いとでも言えば聞こえはいいが、俺は正真正銘ただの人間だよ。」

平然と答える男。

「それは悪魔なんですか？」

さらに質問するエリイ。

こういう状況にされてはいるが、男の声からはそこまで敵意のような物を感じられなかった。

「そうさね、悪魔とまではいかねえが、人間以外の物の魂とでも言えればいいかね。」

男もまた、律儀に説明をする。

「俺はこういう能力の持ち主でね。物心ついた時からこうやって人ならざりし魂と共にいるってことさ。」

吊るされているので男の表情はよくわからなかったが、その声は少し悲しげに聞こえた。

「しかし、こんな状況にされているのに怒らねえのな？」

今度は男が質問する。

「なぜだかわかりませんが、あなたからはそこまでの敵意を感じないんです。」

はつきりとした感想を洩らすエリイ。

「まるでしようがなく私をさらったかのような。そんな感じがするんです。」

そう言うと、男はいきなり笑い出す。

「な、何がおかしいんです!？」

ちよっと怒り気味で言う。

「いや、すまんすまん。お嬢ちゃん見た目に関わらず意外と鋭いん

だな。」

笑った勢いで出た涙を拭きながら男が言い

「悪いな、これも俺のケジメなんだ。お嬢ちゃんには悪いが付き合ってもうらせ。」

今度は真剣な声で話す。

「ケジメ？どつう事です？」

自分をさらうということは、恐らくクリスマスに関係のある事なのだろうか。

「ああ。お嬢ちゃん、ここはどこだかわかるか？」

男が質問をする。

そう言われ、辺りを見渡すが暗くてよくわからない。

でも、どこか見たことがあるような室内、そうよく見るとあちらこちらが弾痕やら、何やら魔法のような物で壊された跡がある。

「あー！」

そこで、思い出す。1ヶ月ぐらい前に起きた事件を。

「そうだ、ここはあるファミリィが使っていた屋敷だ。」

男は静かに語り出す。

「俺はな、ここの奴らに全てを奪われたんだ。そう家族も友も、みんなだ。」

その声は悲しみに満ちている。

「だから俺は誓った。必ず復讐すると。この力も、その為に磨いてきた。」

この力とは、悪霊を使役する力の事だろう。

「だがな、一ヶ月前にその復讐相手が死んだという噂を聞いてな。急いでここに乗り込んでみればこの有様だ。」

目を瞑り、まるでそれを思い出すかのように両手を広げ話を続ける。「俺にとつちや、全てを奪った相手を憎む事で生きる糧としてきたんだ。それが、何もする事無く目の前から消え去ってみる。」

まるで今までの思いを全てぶちまけるかのように

「あとに残ったのは、虚しさと孤独感だけさ……。」

「そこで俺はこいつの犯人を見つけろにしろ。捜すまでに1ヶ月ほどかかったがな。」

そこでなんとなく合点がいく。

「だから、クリスさんを・・・？」

静かに聞くエリイ。

「そうだ。こいつらを殺した相手なら、俺のこの無力感を開放してくれるかもしれないと思ってな。」

その時、窓から差し込む月明かりが男の顔を照らし出す。

短髪の黒髪に、少しやつれたようにも見える顔が、その悲しみを濃く映し出していた。

だが、納得はいかない。

「それにクリスさんを選ぶのは筋違いって奴じゃないですか？」

自分が置かれている状況を忘れているかのように男に問いかけるエリイ。

「そんなの悲しすぎるじゃないですか。憎むべき相手がいなくなつたならどうして喜ばないんです!？」

やはりこの男から敵意は感じられない。同情すらしてしまいたくない。つてしまいたい。

「男にはな、どうしても割り切れない事つてのもあるんよ。お嬢ちゃんのように考えられたならまだ救いだつたかもしれないがな。」

責められても全く男は動揺しない。もう覚悟を決めているかのように。つた。

だが、エリイは屈しない。そうなぜなら

「だとしたら、あなたは最悪の相手を選んでしまったみたいですよ?」

その時だ。

外まで響くかのようなけたたましい音と共に、この部屋のドアが壊される音がする。

「なんだ!？」

男がそちらへと振り向く。

その男へと向かってエリイがさらに続ける。

「あの人は、そういう事が一番嫌いなんです。」

この部屋の入口付近をドア壊した衝撃で煙が舞う。

「例えどんな事情があろうと……。」

この煙から声が聞こえる。

その声はこちらへと向かってくる足音と共に大きくなってくる。

「どんな理由があろうと……！」

右手に溜めた青く透き通った色をした精神力を一つ横薙ぎに振るう。それだけで覆っていた煙が跡形もなく吹き飛ばす。

そして、彼女は姿を見せた。

「アンタのやった事を許すわけには行かない!!」

まるで鬼神の如き形相で男を睨みつける。

「来たな……！」

それを待っていたかのように不敵な笑みを浮かべる男。

不思議な事に、自分でも久しく忘れていた高揚感を思い出す。

「覚悟は……できてるんでしょね。」

そう言い右腕の力を溜め、自身の精神力を法力へと変換し始める。

「墓、その為にやったことよ!!」

男が左腕を振りかざす。

それが命令の合図なのか、周りを囲んでいた黒い魂が一斉にクリスへと牙をむく。

一瞬でそれがクリスを覆い尽くす。

「クリスさん!!」

思わずエリイが叫ぶ。

だがそれも束の間、覆われたかと思われたそこから、青い光が漏れ出す。

それは徐々に大きく膨れ上がり、いとも簡単に吹き飛ばした。

「エリイ、そこでじっとしてるのよ!」

その光から顔を見せたクリスがそう言うのと

「まさか、これで終わりじゃないでしょうね。」

男へと視線を戻しさらに精神力を膨れ上がらせる。

「この程度でどうにかなるとは思ってないさ!」

男はそう言い、左腕を掲げる。

そうすると先ほど吹き飛ばされた黒い魂がまたその男の近くへと舞い戻り、こちらを凝視する。

「悪いが俺の無念、晴らさせてもらうぞ!」

そう叫ぶと共に、黒い魂達が一斉に男の左腕へと纏わりつき、黒きオーラとなる。

その腕を低く構え、思い切り前面へと押し出す。

「くらええええ!」

クリスの方へと打ち出された黒いオーラは、さらに勢いを増し、真っ直ぐ彼女へと肉薄する。

だが、彼女は避けようもしない。

そんな必要も無いとばかりに。

ただ一言、その迫り来るオーラを見つめながら

「この・・・大バカ野郎!!!」

まるで男を叱り付けるように叫ぶと、そのオーラへ向けて右の拳を打ち付ける。

法力を纏ったそれは激しく火花を散らし、その黒きオーラを爆散させる。

「甘い!」

男がそう言うと、四方へ散ったはずのオーラが、一つ一つ元の黒き魂へと形を変えクリスを襲う。

だがクリスは特に動じようとはしない。

「それはどうかしらね!」

そう言いつつ、右足を一度地面へと踏みつける。

それだけで、クリスを中心にこの部屋中はあるうかと思われる巨大な六角形の魔方陣が浮かびだす。

その魔方陣が青白いオーラを放ちだし、部屋全体を包み込む。そのオーラはやがて一つの形を成す。

そうクリスを中心とした兆度十字架のような形だ。

「こ、これは・・・!!」

その眩さに腕で目を隠しながら男が驚く。

「マグヌス・エクソシズム。」

その名前を呼ぶと、左の手のひらに握り締めていたブルージェムストーンを地面へと落とす。

その落ちた衝撃でそれは砕け、中より溢れ出た精神力が魔方陣の光を強烈なまでに増幅し、辺りを眩い光で包み込む。

その光に飲み込まれた黒い魂達は、その形を維持できずに次々と消え去っていく。

「ば、ばかな！詠唱も無しにこれだけの魔方陣を！」

男にとって退魔師は天敵だ。故にその者達がどのような攻撃をしてくるかは熟知していた、はずだ。

今までも色んな退魔師を見てきたが、こんなに巨大かつ、素早いマグヌスエクソシズムは見た事がない。

そう、これがウィザード・魔術師をも凌駕した力、精神力開放限界レベル7の真の力だ。

その光に見とれていたのか、それとも恐怖していたのか。

彼女の接近に気がつかなかった。

「しまっ!!」

そう言った時には彼女から繰り出された握り拳に対処できずに、見事に左頬へとクリーンヒットする。

精神力を帯びたそれは、破壊力を増し男を吹き飛ばすまでに増幅していた。

後方の壁へと強く打ち付けられ、一瞬で意識が飛びそうになる。

青い光が消える頃には、男が使役していた黒い魂は跡形も無く消え

去り、目の前に彼女だけが立っていた。

「く、くそが・・・！」

何とか体を叩き起こそうとする男に

「もうやめなさい。勝負はついたわ。」

クリスが話しかける。

これ以上の戦いは無意味とばかりに拳を納め、近くに吊るされていたエリイのロープを腰から引き抜いた銃で撃ち、切り離す。

その衝動で落ちてくるエリイを両腕で受け止める。

「大丈夫？」

先ほどまでの鬼の形相とは違い、優しそうな表情で話しかけるクリスに少し涙ぐみながら

「はい！大丈夫です！」

元気な声でそう答えるエリイ。

体を巻きつけていたロープを外し、倒れていた男の方へと視線を向ける。

男は止まろうとはしていなかった。

口から血を流しながらも、無理やり体を叩き起こす。

もう引き下がれないのだ。自分は全てを失った。家族も友も、憎むべき相手さえも。

「俺は・・・。」

何とか立ち上がり、またも左腕を掲げ、先ほどのとは別の魂を呼ぼうとする。

「俺は・・・！！！」

左腕へと黒いオーラが集まっていく。

「あきらめの悪い男ね・・・！」

そうクリスがまた戦闘態勢に入ろうとした時だ。

突如、近くにいたエリイが男とクリスの間へと入り

「バカ！！！」

そう言っただけ切り男の頬を叩く。

「何でそうやって全部自分で背負っちゃうんですか！何でもっと良

い方へと考えようとしませんか!!」

突然の事に呆然とする男。

クリスもその行為に唾然とする。

当に左腕の黒いオーラはどこかへと吹き飛んでいる。

「あなたは何も悪くないんです! 一番悪い人はクリスさんがやって来てくれたじゃないですか! ならもういいじゃないですか!」

さらにエリイが叫ぶ。

「こんなことあなたの家族やお友達が喜ぶとでも思ってるんですか! そうやって死に場所求めて、誰が得するんですか!」

「そんなの悲しすぎるじゃないですか・・・!!」

固まった男の胸へと腕を打ちつけ、泣き崩れるエリイ。

男が沈黙する。よく見ると男もその目にうつすらと涙を浮かべているようだ。

クリスがその男へと近づき、振り上げられたままの左腕をそつと降ろさせると

「あなたの負けよ。女の涙に勝てる物なんて無いわ。」

その言葉と共に、地面へと崩れ落ちる男。

悲痛な叫びを上げ、その場へと泣き崩れる。

この男の復讐劇は、それで終わったのだ。

最後の最後に、男を叱ってくれた彼女によって。

その後の話によって、特にこの事は自警団には話さない事にした。

今はヴィルゴ邸付近の街道だ。もう12時近くだろうが、月が天辺近くまで動いている。

「いいのか?」

男が言う。

「いいもなにも、さらわれた彼女がいついていいんだもの。あたしがどうこうできる事じゃないわ。」

タバコを啜えたまましゃべるクリス。

「もう復讐とか考えちゃだめですよ?」

傍にいたエリイが話しかける。

「ああ。お嬢ちゃんの涙はもう見たくないからな。」
少し恥ずかしくなりながら男が言う。

それがおもしろかったのか、少し笑いながら

「そういえば、まだお名前聞いてなかったです。」
思い出したように聞く。

「俺はカーク。カーク♡マイアだ。お嬢ちゃんは？」

そう言うと、エリイは嬉しそうに

「エルクレスティア♡マクレガーです。ちゃんと憶えてくださいね？」

そう言った。

昼間にクリスがソニアに対して言った一言を思い出しながら。

「そうか、その名たしかに覚えておこう。」

そう言うと男はクリス達の反対方向へと踵を返し

「もし何かあればいつでも力になるう。その時までのさよならだ！」
身に纏ったマントをなびかせつつ歩いていくカーク。

「カークさんも気をつけて下さいねー！！」

その背中に聞こえるように大きな声を上げるエリイ。

「全く、あんたには驚かせられるわ。」

そう言いながら、今の時間を確かめようと携帯用コンソールを上着から取り出すクリス。

そこで気付く。

「あつ。。。」

そういえばここに来る途中にコンソールが鳴っていた事を思い出す。
コンソールの画面にはエルハイムからの着信と、何かデータのような物が1件送られてきている。

急いでそれに目を通す。

とても簡単な文章が書いてあったただだが、それだけで今の状況を
読み取る。

「エリイ。。。」

コンソールを見ながら話しかける。

「ふあい？」

情けない返事を返すエリイ。

「走るわよ!!!」

その手を取り、一気に駆け出すクリス。

「わわっ!!!どこへ行くんです!!!??」

突然の事に驚きながらも一緒に走り出す。

「エルハイムのとこよ!もう時間が無いわ!!!」

その顔には少し焦りの表情が見て取れる。

エリイがなんか後ろで騒いでいるが、もうあまり耳に入ってこない。

「死ぬんじゃないわよ、エルハイム!!!」

そう思いながら真夜中のプロンテラの街を駆けて行く。

まだ、長い一日は終わらない……。

そう月夜は言っているようだった。

番外編 姦

クリス「その変換はちょっとまずいんじゃない？」

(後書き)

熱血的な展開をやろうと思ったんですが、何かこんな感じになってしまいました。

なかなか思い通りにはいかないものですね!!
もっと文才がつくよう努力します・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2284p/>

ラグナロクオンラインSS第2章 番外編 SAVE！～彼女の事情～

2010年11月30日21時57分発行